

Blue Seal



Composition Book

樂
心
毒
皮

一條路

賭の眼

人のよりた道は此一條しかない
それは暗闇の道にあり永年の
無限に長く人生生活の根本の
私は藝年になつたが何となく
田舎道で此道に道にあり、
山にあり、理地も昔も皆然
たか一つと見ても、それとよくには
いふやうに見える。傍にそれと
舞臺を、賭。玩。ゆしと道に
隠るめ、まことの財に賭する
賭の眼にも世の常言を信する
十も貴いやうなところ。
あやう。か、それの人生生活
或るつかにせり吉針か、知れ
手ん丸。
「ミ、等は三角の針後は、やつは
るはずか、新茶屋へ行くか」

一條道

賭の眼

人の歩む道は一條しかない。

それは、賭博の道であり、永年の道である。

無限に長く、人生生活の根本の道である。

私は、真平になつた分、人生生活の根本の道である。

田舎道、又、市街の道、又、自然の道、又、

山道、又、河川、又、海、又、空、又、地、又、

木、又、石、又、土、又、水、又、火、又、

金、又、銀、又、銅、又、鉄、又、

鉛、又、錫、又、鋅、又、銅、又、

鉄、又、鋼、又、鋳、又、鍛、又、

鍛、又、鍛、又、鍛、又、鍛、又、

鍛、又、鍛、又、鍛、又、鍛、又、

鍛、又、鍛、又、鍛、又、鍛、又、

鍛、又、鍛、又、鍛、又、鍛、又、

鍛、又、鍛、又、鍛、又、鍛、又、

鍛、又、鍛、又、鍛、又、鍛、又、

鍛、又、鍛、又、鍛、又、鍛、又、

うん
そ
た
ふ
ま
そ
う
の
わ
ら
う

[illegible]

荷と才一也の長米の二入を賣盡す。市をたたりて

五斗の間に生長す
才二世の曉
青
1990

は 解 決 出 来 る と は じ め に し ゐ ね ば ね 。

告之 例 千 人 才 三 世 は し かな の 残 事 に 世 二 一 二

半生改の生に外にうははあかう。

易也 現狀 環境 今後の 変遷は 従来の 強み 弱み

圖を
計の
をわ
るさ
ちり
九う
ろ

和 白身しらみ之の十じゅう年前ねん、た有あき等らは、あき等らの

依點地圖
 2475
 生活點地圖
 2475

運居、又豊歌と成ると
地回通ソには
行かぬはなり

社會主義の存に於ては、
資本主義の存に於ては、

社會の流に接するに
重くして、
新をさす

燒什瓦為枕

米寺の時寺
今臨の家
かき
か

備前
備後
備中
備前
備後
備中

借の眠

一着う直に

進む眠

その

お世は部つと思ふ。

それは此命、思回路におする、高北の眠は

な



山地に運河を拓く謀事にはあり、

なく、随所に花雪、流木に二舟を拵り、

の眼で見る。

一先

事心の

連歌す眠、その片を直に収め

女は聖人を生み出す事をもたぬ

目録

和は意を言上 工が人の為人を感ぜぬ

なぐめいより人の言をききし言ふかき者たまふ

五日いよいよ生れ生れとて人の子身にたふ

小たや人の女は言をききし言ふかき者たまふ

結女は美しき言をききし言ふかき者たまふ

車へ外にわたりはたささうむ

いかにし金一銭をかくし役をききし言ふかき者たまふ

いふ

工がやあ女は十銭七持きさうはし十銭のものもいふ

しだい。十銭あり十銭以上のもの七回はおひ

と置れとの交換に當る方。女等には十銭のものをかきしやう

ものたり。一週一回は女等はあつたにききし言ふかき者たまふ

女等は十銭のものを十銭のものをききし言ふかき者たまふ

じにうーがユタヤをききし言ふかき者たまふ

偏しそれききし言ふかき者たまふ

はま婦人は、工の言をききし言ふかき者たまふ

光井をいふ。女は十銭のものをききし言ふかき者たまふ

ル
ハ
3

程

いかに美し一の。お水も遊女より、エカヤ人も、顔面ゆえに
あゝ。顔面皮方々に性格なん、あゝ、若は方、

[illegible]

又女の存せむ。海を克つに能ふ如く排撃する

性日本人。漢大達分。天授。金中。十。二。未。し。
此。金。面。れ。ち。芳。4。廿。七。の。子。と。思。ふ。

ろくにん、もうし、もつと、をき日、を、20金、をは、又、助、り、で、

脱走を止めようものだが。
 アメリカ移民を吾国人に招待する
 ことは、吾方にとりて
 遠く吾方にとりて
 には、之をこの

左の母一孝氏に
 在る。

昨日、日本橋へ十仙のトマリを寄して作った。
「うん、うん、でもおもしろい」と言っていた。

「おもしろい」のトマリ
と言ふ方が、
「おもしろい」

アルマホーの旅行日記である。

インパは東の太平洋のその一つの島である。

それは非常に形が大きい。其住民は容貌美しく
生活状態は開化している。彼等の言語は信じてい
料である。彼等は純く外国の勢力より獨立し

彼等は自身の王達にあらずして其の

彼等は黄金を非常に多く持ち其の

多量無盡蔵である。——去るその黄金

を扱は黄金の扱い扱はあつた。

此島に富み多量にありあつた黄金は今に

ハライ汗の腹中にはそれを征収し彼の領土に

合しやうとの欲望を起つた。これを實行するため

彼は多くの艦隊を作り多くの軍隊を率へ

出帆した。——何のこの結果は例の神宮で

勝つた。

その時現は、勿論其の黄金を

からめと雖も其の黄金を其の黄金に

神宮が其の方だと、其の黄金を其の黄金に

元來、其は北太平洋の島である。

今日この國を提りし皆言寄々、下に世は儼としてあり
~~我~~^我も老うたことも御さるゝが、一筋不意の秋に
 いは方いか。國と因ふ別れも人から辛み、我親兄共
 女友今下和に方る。も少くは婦若金。
 誰しも金故に貧もあらず。
 するどいものす。心もす。
 何し金故に
 争も。
 西よか。人を放つてゆきもなり。時代の来たるがごとし。
 言教に依り、其意を妻によし。世の世の大空のと。
 所変。それは夢に過ぎなかつた。

すゝ文もすゝふもすゝ

金板に

字无

西

西へ、今更にうやもなり時代が来るとか

よふ方に任る。若くは我によりて世の世の大徳なり。

所變
至本
乃夢
以過
老有
いた
く
う
か。

山 話 ちやうや 日本ここ
4 山 話 ちやうや 日本ここ
山 話 ちやうや 日本ここ
山 話 ちやうや 日本ここ

身の世からん形を味び、お正月も高座のくに

くすふつゝのりと、お正月も高座のくに

といふまにわつしを尋ふまを話したる。

越りリスコスカリのまを解とはくし笑れ、と事には

外へたふす、お正月も高座のくに

お正月も高座のくに

お正月も高座のくに

お正月も高座のくに

お正月も高座のくに

お正月も高座のくに

お正月も高座のくに

お正月も高座のくに

お正月も高座のくに

お正月も高座のくに

お正月も高座のくに

お正月も高座のくに

お正月も高座のくに

お正月も高座のくに

毛氏

心裏の言の余

まり乍ら

等々と生々すの

禁
マ
に
し
た
し

解

スキーでも遊んで、インディアンを
お月

ても 子ううと、一はあふに 笑ふるやう

たこ^もな^もこ^もた^もた^も
うい^も

小島も方々正の二日の夕暮を、海邊へ下りて
中快な談話も方々ものかと思ふ。――
半のちび生々み

自五十八のおゆやせうきの松茸は何歳に成つたか

44 米櫃のねい

不可なり、
亦草は、
又お米、
ちよと、
か、
て

あすの座と云ふに、

おすく座敷の二云子のに
アうそ本のお輝に
おすく座敷の二云子のに
アうそ本のお輝に
おすく座敷の二云子のに
アうそ本のお輝に

かたはんにち

心はすれ
くも

12 子 子 子

心成を考ふ

新入のつとめ

お化怪に、女は青顔をかゝし、
張四郎をかゝし

必
此
を
愛
する
心
の
方
に
は
違
い
な
い

賀ハハナリカ
 男ハハナリカ
 女ハハナリカ

心はなつと手は

あやいは赤に七宝を冠する所の紫である

草木は一場は世の如に朽たり、吾を爲すは亦た然る也

土来りてく。人を預け候もや。

併し、人心股に直に等しく、
~~股に直に等しく~~

上事為
跟病にも
色を
方人
加
み

同時に、~~なる~~人は善に立たふ人なりと云ふ事
人は~~なり~~善なり。

尤も當今、憂い、憂い、生活、やうなことを考へたう
と、食事も来ます。一子を構へ、自給生活にせよ
と、知り、是、す、やうな生活をす、よ、には、相、言、は、せ、る、人
には、さ、う、い、ふ、必、要、が、な、し、な、ら、ぬ、
殊に、女、子、の、身、で、知、る、者、は、以、該、意、以、外、に、

是處に所に所之苦一のは。

曰夫人罕芳壽考

漢考友自より人を信ずるに、
時手方た舞をいひ、夫れを
いふ。

十三日同十の字の二個分也一週十三日四十五日
の月後料の役等、生活をしてまかりし
あるとてある。

先生に尋ねた
 事の男のあはれはうしろしめさ
 ずりというにか

リンのハリーの大佐が、その愛子誘拐事件の

今判交じ、嫌疑者ハリーに

起すその事である

墓場での理髪を済ませる時、目撃者大佐は

ハリーと大佐の右に居るなり。と証言した。

ハリーと大佐の証言は、どうして誰か一人

目撃者を、彼たと証言をすることゝする

ある。こんな事

誰か、最近の日本近信に

式丁也吉が、其の生前に、新大佐の

新大佐を、彼に物言ひを

大佐が、彼を、目撃者として、

新大佐は、

近に、その目撃者を、

二、その目撃者を、

人目の、その目撃者を、

新大佐は、その目撃者を、

よく 英語などには、

私も先日、ある裁判に参り合つて、新法士から
なむに、とうし、その七月十日を貰ふてゐる人た
一月十日はとうし、一人力十日は貰ふてゐる人た。

美に裁判の心算。回信。判りきつた。厚鹿や
無事なものは方と忍びつた。同時に、法徳人の
行動に忍びし事件を建すこと。並に
なごめをこと知つた。黒を白、白を黒とは

紅の言、去い疎はなすやうなは、
理、~~中~~使はて、
記

理窟の說明と事柄の分析とを、
その分析の末に、その

笑持をたねすてふしほー

そへ、そんか
つを
占へん
草の力

甚だ方々執を思ふ。

一冊 一冊九十五仙で一通目の金料 二人分の に足りるが、
もう半国の下積 労働者の借入金には足りなく
たう、五十仙が足りない

これは同様に通信費 ニツカおうイキの増減利と
芝和利一冊下の一冊増加した人、彼等の話より推察す
といふ考へても 我々は一冊九十五仙で一通目の金料 二人分の
十分たとは ~~あり~~ 宛先に修められぬ。身世に 借金 が取っ
限り、同ニツカ一おうの言ふ 四時目の金料 二人分の
一通目金一で行ける。おはちしは 是方堅まこと
~~通~~ 通す。外はない。 十通

一冊十仙と見積りしても一通目二冊十仙だ。 同金料
より見て、不況に自由な労働者や曲用
者や、亭子の女店員等に （皆） 四五十仙方んて
ありやとぬ。

政府府が、ルーズベント人、いんちにか力んべきも
43人、失業者は、41人、毎年、結果からいふ第一も
不可能なところ、假に同金労働者の借入金と
五十仙外一冊に （仮に） せよとも、ナニうにも （借金） を生活不
一冊、二冊保ちても一年中 （借金） を返さずしては
不可能。

なりんた。牧場から牧場を巡って豊田生活をする
日まぐや、木、地、冬人、善と来たう。米国の警察官人
に、考うたけ頭、ふ、ふ、ふといふた。

その三、は牛跡一師は、えに用、勞働者へ食つゝやうに
取付政治制度、経済制度を、変換せよ、とある人
たふさ、一筆おきると言ふ、キ大。

又、~~ある~~ ~~もの~~ ~~も~~ どうお幣を搭いりも 現在の三宮
 金庫に金銀の計で一圓四一五仙の金貨
 の金貨一圓四一五仙の金貨を ~~半圓の~~
 金貨 ~~半圓の~~ 金貨 ~~半圓の~~ 金貨 ~~半圓の~~ 金貨

新田に發着する
 新田に發着する

アメリカの生活は何かとも困るから困る
れたら、金と云ふが、

今のゆき分をいふ族生活者には、病氣とた
時の醫を付と失業のつらさである。

昔は、志のわが、結婚のなや、死の事、
えと、昔、親兄弟のなや、死の事、

さういふ、他、親兄弟のなや、死の事、
く、理規、実生活の困窮、生活、

健康の明か、不健康な身。不自由な
なる昔、人をも、昔、

生活の下、考へ、さういふものは、
傷、

昔、一、病、生、
の、さ、え、だ、あ、や、り、き、な、い、

何か、一、書、入、書、
は、醫、者、病、院、身、分、大、入、書、だ、

その、一、月、も、不、満、の、一、人、が、病、院、に、入、院、し、
、や、り、し、の、方、は、病、院、に、入、院、し、

たけつを授けしとて同に命は方。二、三、三、
~~お~~病すもうもりなる死んで保身金をし
福に致したるや。一、その前に、此書のため

十幸た。位には老うさうさう。

先日、ある程の夫人が病没した所の境を運つ
てゐたが、~~手~~退院するのに入費を支

拂はせられ、退院も出来ぬと言ふ事あり。

その夫の所は、トナリヤイ、42の明年迄

のクラフツを、テイキウになんか、~~月を~~

大幸をうてゐた。

實に牛にやなものである。

わつたら、却て病院に入つたら、さう金とさうさ

る。死す。大抵今の日本人はたしか

却て病院に、何となくめ。

最近の却て病院は、小規模の私立病院

等より、全般に、はるかにすくなく

ると思ふ。やうとも、私は、貧乏人の

病を、保つて、何となく、~~病を~~

病を、保つて、何となく、~~病を~~

一、² 考年²に² 郷²に² 近²衛²の² 誰²が² 結²を²
 固²く² 幸²ひ、

お前は生きた証をもちと半錠しゝ来い
とせよ。此の世にやうに言ふ排も夜つた
る。男にりて、事をもわづかなした。
私は心に留る途なく、その出来事を述
べて来たが、この男は、其方も、席をうつな
かっただけ、理由を訊き、それは邪悪の背下
れと思つた。

金持さん方にとりあこと

成命するにあたり、

人を預へば、生計者に方とて、あつて、
 半国では、道徳的に考へる、
 る、やうな、
 軒を並べた二軒の間に、
 千軒の間に、
 の二軒は、
 他をたはすこと、
 ような店を、
 考へし、

一人の理想は、たゞは他の一人の理想に
なり、現代社会には、常に下層生活者
とあり、あり、あり。

10 船

五

船打船バ、夏の一入りの日に船を。船打船と

しつば、何だか、船打するに気がしつ、やうに思ふが

甲、三等船位で船打するたふ、普通通の船位

より船位、船位にたふしと

夏船の三等位は、船位にたふしに、十人、十人

とは船にたふし、船位にたふし、船位にたふし

の時にも船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし

たふし、船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし

船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし

船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし

船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし

船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし

船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし

船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし

船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし

船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし

船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし、船位にたふし

加子船説

思子 12 7 4

今也

産胎は
 といふ
 三等
 産を
 保つ

一五五

۱۱۱۹

と、
余りに

殷隆乃

船の生活は、実に窮乏で過酷だ。

金
金
金

旅 1 2 3
船 9 中 2 1 言 1
2 9 年 控 係

二十萬石の幕
この幕は
五十萬、
この幕

山陰 三ノ五十華月等々 市也

言定は之に角、食定や、旋るる

27
 199
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

いふものはなにかい
人は

9
2
1
5
12

高の金を

言語は暴力を盛んにしても、暴力を、暴力を盛
にやるといふ失政だ。百端施すにそれだ。アフリカの
世界は、民を食ふ者たる外國の、食を食ふ者たる
人たふさ。此も、食を指示するも、頭目、市に
引つきの利益者、中絶するといふ。と、一語一語、
転、古語古語に、國者、排日、夫、夫、語、語、あゝ、は
たつた。
偏し、排日、回、回、の、實、は、實、に、た、人、種、別、の、見、か
ね、い、い、ふ、も、た、い、了、在、済、言、信、が、何、を、引、こ
る、と、知、る、が、
今、ま、つ、り、の、ソ、ト、ト、の、事
件、を、觀、る、可、い、。

日本の平均所得の差を以て

平均所得の差を以て

男 四十五歳

女 三十二歳

日本の生活

日本の生活

日本の生活

日本の生活

日本の生活

日本の生活

日本の生活

日本の生活

日本の生活

日本の生活

日本の生活

日本の生活

日本の生活

日本の生活

日本の生活

日本の生活

日本の生活

おるい

税金あり 国定であるか。

し、~~本意あり~~

此は再建を急ぐ。娘を賣し 餓へ死に

ま。一 傳へて 税金は収めよ。と云ふか。

同云 餓へても、~~養育費~~ 所には金を送るわい。

ありぬか。い。 国定のもう。養育費をいふた

か。姓やわ。その生計を養育費といふた

自給事にあり。是なり。 養育費。 うち

今日 養育費 養育費をいふた。 養育費

と云ふ。いふた。

養育費。 養育費。 養育費。 養育費

え。本意あり。

持世は皆 ^{すべ} 利るが。持駒をあり余り持駒

るものも、使ひあつた久し来た

持世は皆 ^{すべ} 利るが。持駒をあり余り持駒

では王様 ^{親王} 身動きなうまに場にあらうことある

又、持駒にフ一歩たぐも、うつたりした場面は

中で、^数 勝敗をすることある もつて

上手。下手は別としてある。

伸び伸びと若。持世を ^{すべ} 利るが。持駒をあり余り持駒

キーの ^{すべ} 利るが。持駒をあり余り持駒

きこの本道である。 ^{すべ} 利るが。持駒をあり余り持駒

来きたなり。見苦しい持世を ^{すべ} 利るが。持駒をあり余り持駒

性軽であるうたうた

此等生活も。持世の ^{すべ} 利るが。持駒をあり余り持駒

人持。後。とりあふるなり ^{すべ} 利るが。持駒をあり余り持駒

何といつても伸び ^{すべ} 利るが。持駒をあり余り持駒

かた生まれ。おは人生の生活なりとなむ。

（美）ソノ ^{すべ} 利るが。持駒をあり余り持駒

（美）ソノ ^{すべ} 利るが。持駒をあり余り持駒

限りである。

伸入りし

人生、福一々貰ひし。日知ほつて、さうさうな

た生活も。 49は、まきり

功命では、そなたも、余り望めな。持時、

オニ、たたり、戦を、交へ、あつた。天、既、田舎、

その点

自然の、愛、さう、を、手、に、あり、ま、

そこ、に、私、を、死、り、ま、を、使、り、ま、

2、銅、ま、は、ま、高、の、ま、高、で、ま、。 近、

な、ま、の、ま、な、ま、。 既、市、に、ま、

所、に、私、女、は、ま、性、ま、。 既、市、に、ま、

え、ま、ま、は、な、い、。 中、ま、ま、

既、今、ま、の、日、ま、。 中、ま、ま、

ま、ま、。 中、ま、ま、

ま、ま、。 中、ま、ま、。 始、ま、ま、。 中、ま、ま、

オニ、ま、の、行、く、道、も、。 自、ら、中、ま、。 中、ま、ま、

人、の、ま、ま、。 中、ま、ま、。 中、ま、ま、

中、ま、。 中、ま、ま、。 中、ま、ま、。 中、ま、ま、

オニ、ま、。 中、ま、ま、。 中、ま、ま、。 中、ま、ま、

中、ま、ま、。

14. 隣人

一軒の家が、草庵にしようとして二つの大柱が、住めやうに建つて
うねを草側を、私が借り、最近、草側に日まの、
移轉して来た。

一圓目、目に、元院の下で生活する隣り同志が、
私は、まだ、一重も顔を合えぬ。分譲言葉もすぬ。
移轉の喜びを出しやうか。と思つたが、やめた。

日まの憶習いは、移轉して来た人が、挨拶に来る
のが、当然と本々ゐるからである。ことに、私の
つたしをまけたのは。

そのオセ世の隣りの夫人が、近所の人達に、そのお
アメリカの大家出を、移りに、度するさうである。
私は、極端な野人である。お米分にしようたやうな
常屋に、移轉して来た、貧乏人同志が、度
を、すね、後援も、め、採つたう、人達も、事
不要だ、知、言は、めに、限る。と、私は、お
叩きの、ある。

アメリカ人等は、隣りに、誰かが、移轉しやうか、何
の、何う、何某と、判、め、者だ、こゝに、隣り

青林、和の向側の一日、主人族も、日本語の教
 師が、さうだ、その人達も、隔り、近所の人に、奪取、こも
 朝の挨拶も、めいといふ。必敬、おひさし、少知、謝
 罪、おと、自に、すゝこと、大、心、情、に、走、つ、概
 るゝと、観、る、外、は、な、り。

それが、日妻の侮れに覺え、尚良く生れし、
 協調し得ぬ所ではないか——と思ふ。

協調し得ぬ所らではなからしく思ふ。
 何々、何々団体。何々の教會と。木の枝の如く、根より
 伸び上るものとすゝこそ久きも、とも、因縁等なりであらう
 と思つてゐる。吾等の第一ではちがひなき。

今、葉隠樹

よむところある。和久留山金沢、
こゝとあるところある。

よむところある。
よむところある。

良き木の種は良き木を生ず。美しき木の種は

美しき木を生ず。美しき木の種は美しき木を生ず。美しき木の種は

美しき木を生ず。美しき木の種は美しき木を生ず。美しき木の種は

美しき木を生ず。美しき木の種は美しき木を生ず。美しき木の種は

美しき木を生ず。美しき木の種は美しき木を生ず。美しき木の種は

美しき木を生ず。美しき木の種は美しき木を生ず。美しき木の種は

美しき木を生ず。美しき木の種は美しき木を生ず。美しき木の種は

美しき木を生ず。美しき木の種は美しき木を生ず。美しき木の種は

美しき木を生ず。美しき木の種は美しき木を生ず。美しき木の種は

美しき木を生ず。美しき木の種は美しき木を生ず。美しき木の種は

美しき木を生ず。美しき木の種は美しき木を生ず。美しき木の種は

美しき木を生ず。美しき木の種は美しき木を生ず。美しき木の種は

美しき木を生ず。美しき木の種は美しき木を生ず。美しき木の種は

美しき木を生ず。美しき木の種は美しき木を生ず。美しき木の種は

美しき木を生ず。美しき木の種は美しき木を生ず。美しき木の種は

美しき木を生ず。美しき木の種は美しき木を生ず。美しき木の種は

漢治 四月十八日

春の英気を風に任せ、一かゝる漢治にあつた

半端な事は、春とは言へる、春の陽を

心に抱たし、春は、久かたぶりの遊山が、とても

かた。

負ふ、その中に、海を渡る

あめと、鳥、幼女を連れて、の、川の、鳴き、さう、

春の、雨、か、女、僕、東、性、を、り、も、じ、い、ま、え、た

た、と、い、ふ、が、半、日、い、れ、た、と、い、ふ、か、

半、日、分、な、る、第、一、の、生、活、其、に、あ、る、が、半、日、分、な、る、第、二、の、生、活、其、に、あ、る、が、

半、日、分、な、る、第、三、の、生、活、其、に、あ、る、が、半、日、分、な、る、第、四、の、生、活、其、に、あ、る、が、

半、日、分、な、る、第、五、の、生、活、其、に、あ、る、が、半、日、分、な、る、第、六、の、生、活、其、に、あ、る、が、

半、日、分、な、る、第、七、の、生、活、其、に、あ、る、が、半、日、分、な、る、第、八、の、生、活、其、に、あ、る、が、

半、日、分、な、る、第、九、の、生、活、其、に、あ、る、が、半、日、分、な、る、第、十、の、生、活、其、に、あ、る、が、

半、日、分、な、る、第、十一、の、生、活、其、に、あ、る、が、半、日、分、な、る、第、十二、の、生、活、其、に、あ、る、が、

半、日、分、な、る、第、十三、の、生、活、其、に、あ、る、が、半、日、分、な、る、第、十四、の、生、活、其、に、あ、る、が、

半、日、分、な、る、第、十五、の、生、活、其、に、あ、る、が、半、日、分、な、る、第、十六、の、生、活、其、に、あ、る、が、

半、日、分、な、る、第、十七、の、生、活、其、に、あ、る、が、半、日、分、な、る、第、十八、の、生、活、其、に、あ、る、が、

半、日、分、な、る、第、十九、の、生、活、其、に、あ、る、が、半、日、分、な、る、第、二十、の、生、活、其、に、あ、る、が、

街の地事と山田新寺をほひこつ。こゝを新寺
 達も新寺は。その父よりゆく。朝ふにたあめたい
 白地
 に西より
 一人いふ。

しづくはにこゝにみえは。小女達の連れは。その父よりわかく
 日まはるまゝ。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。
 三日月の光の中。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。
 本に遊んでゐるのいふ。

ながら。丁度。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。
 笑聲をきき。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。
 あつた。

自然に。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。
 教師にあつた。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。
 命令に。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。
 海に。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。
 溪谷に。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。
 と育ち。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。

海は。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。
 は。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。
 山に。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。
 山に。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。

山に。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。
 山に。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。
 山に。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。
 山に。こゝにみえは。こゝにみえは。こゝにみえは。

アメリカの白人に三つの悪癖がある
一、時日をうまくぬこと
二、金を稼ぐこと
三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

三、悪徳を教へること

見て、王とある。利物を得

後のいふ、天皇の木の幸に坐すの類に志を擲

てを得。或る王の民は、木を得て、木を失ふ

事には、木を得て之を失は、利を得ると利に

縁を官を得た。

あに、我が夢も、一朝の夢なる人や

必しや、失割の艱也、言の夢のあつけ

のー来るや確かなり

狸、かこつを難小のは、り、里と別なり、人

夢は、人と里なり、刀剣を以て人を教すは、童を得

人、刀に夢なり、刀は金なり

金を得て故郷に歸るなり。

何人か、賤けや、

我輩の天下無類の夢判斷を、

獨逸のハナハの
新畫や沢
靴下
鬼子。

今尋新田十畝に付こ
二三畝を牛やふと思ふ

燭
 燈
 の
 ひかりの
 短き
 光
 陰
 ち、ちと
 思ふが
 ごと

或曰 騎士一人の妻に 言ひ寄る。

客々々々
騎一丁の馬を引かす

ナカ
ル
か
人
一
方
習
玉
権
手
ん
横
持
に
生
活
を
し
た

或るやうな
小世を
伴ふ

うらふたまたまの所をヤル山群ル訪ふ

所
土
もとなす、
モカリ
何物
はにふの
受禪を
得

い
紅女を御した、
食った美女に逢ふ

十年の徳の
旗をひき
つる

金に頼るゝ金になし
 新より心
 夢に思ふ

小井の 新井 山 坊主 子 一 八 二 暗 九 十

等
 市しに所は、
 支那のやうな
 ところを

ハ
イ
エ
ニ
ハ
重
要
知
量
佐
九
諸
君
上

吾等は、この切腹の處を有様へちり

短島ノ荒人ノ所ニ舊ノ必要ニ對シ。

平、マの草花に宛てて、
 この鷹の爪の紋の字を大す。

子
文

と信も信しり
つまつり

更にこの等しきものなり

文章の法は世にあり
うへにありしに
まづありしに
ありしに

今
僂
手
も
こ
は
市
の
新
三
子
久
世

醫學部
加西
新也の由
とある。
三つ新也
多わんつ
んちの

予
三
の
て
あ
り

新
刊
三
つ
つ
二
冊
地
判
す

わ
ぶ
ん
に

事
護、日
来、新
年、子
を、愛
く、い
れ、う
つ、い
ふ、女

一也 二也 三也 子 6.

羅新はの一等入選候 又考老と譜々

作者の長所は、その人は、竹幸に、筆、考、文、

ル
家
来
た
後
ま
た
乙
と
う
な
つ
人
び
あ
る

大綱に
始めろ
終りま
推考
言ひ
並
降
下
十
三
分
之
君

手紙にきた
このまゝに
長年
あゝ、
まゝに
した

推言を會談に及ぶ會談を軍事に及ぶ試みといふ

一、
主
教
所
在
之
地
方
官
廳
又
三
十
分
以
上
之
地
方

この位に「考キ」ておとく人は俗事にさう多くはなからう。

俗事は、新・詩・文、流・本・に、掃・き・し・め、大・作・夫・身

の・生・活、生・活、立・身、生・活、その・生・活、た・ま・に、心・の・心

考・き・て・お・と・く

女・子・同・様、生・活、考・き・て、お・と・く、大・作・夫・身、

い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、

い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、

い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、

い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、

い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、

い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、

い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、

い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、

い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、

い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、

い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、

い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、

い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、

い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、

い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、い・く・大・作、考・き・て、お・と・く、

左に因主客あり。

萬法收齊
萬法收齊

俗者の新利アリふたは、
 童女と云ふ才二世を身の心の旅

本つゝ文辭はよく
言ふがまゝ
老來の句

う 光 月 に 女 子 3 7 0

ア
カ
し
つ
の
御
勤
に
ま
あ
か
い

言等付井之才三絶也板也たる

342

つもり
ふり
知るめか
そねほろ金ガリウオニ世娘を現あ

左田本也。

こゝに説くは、老を畏るを主とす。意云く、マ、わ、り、つ、り、マ、
マ、
マ、

たしな

王に之の道は
 是達は
 王の
 娘や
 其の
 子に
 生れし
 世に
 存び
 たり
 特に
 考へ
 下り

アーク・ツィンクに於ては

ケウケニ人等も皮を丸くする、金銀の大作、大彫刻

1/54
1/2
1/4
1/2
1/2

つ
め
さ
ふ
あ
も
ち
あ
や
し
こ
こ
こ
そ
か
は

父に曰く、此の書、世に事ありし、
其もかくりて、

炎
乙
妖
心
子
め
た
け
其
方
大
一
今
ま
は
去
て

考牛を五増へゝ名を五増あくとす

次一の利は金と云ふと云ふ

わねえ、いっつぱにまた来方ころ、いっぺんね、
松子、心うき返る言はうぞ。

海

43 即也 斗 世 美 年 外 此 斗 生 15 元 取 16

米
也
4
2
0

修云、世の減るゝ人
人生、一足多花を
咲かぬ、一足

新草集卷之四

四
子
海
山

天
子
何
物

以り新十巻に依りて修めし一巻を以て之を以て

乙卯年作
新法
通
ハ
事考
文

方
諸
金
幣
跡
上
右
不
有
人
以
人
告
許
金
上

何回も
たて
し
る

そ
木
は
け
に

う
き
の
い
ち
げん

人生在己。隨分。
常樂。

七
四
二
一
三
九

とつ
ふ
大
士
の
友
而
も
数
は
少
な
い
餘
り
を
持
て
居
る

ちの
 若人、心經を著すなり書主なるは性ハル

女の心玩をうまうする人

女老の心、木更心、女。の心を
うきうきと云ふや、ふんたに

有
村
河
在
左
右
之

言々々々々

く
一
た
た
の
は

子

丁卯年

玄
一
也
也
也
也

人、
受、
も
強光の

めづるゑりたつたしとく

仲
乙
金
乙
乙

萬物之靈

博學之

夢をみて4かたえ

44
20

三

邦
收
包
包
包

1

或、物分ちとて世に
我人の主なりとの説を
心にとりて性理に對し
て人としての一節中を
所當となしといふ
ことだ、この因がこ
の論者はマニヤカ不
ケル原因として
師も踏切たや還き知
るあつたならざるか
なりといふあり

フ
レ
ッ
ト
ル

ヤ
シ

空にみえたるやちやちやといふやうな声も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

下町もいかり船もいかり船もいかり船も

後、私共其所におたふ前にて人々恒
悔あり歎し智なくし

い！——や、老入だ。
わや。煩悩てる夢を
手て、うろあしく。

寺でなのたーとろあつち

世の第一
四

下、左 歌 尊を眺めし 茅は 青なり

ちのうた 9 12
 ちのうた 9 12
 二日かたに
 弥平のうたを
 梅ヶル
 ちのうた 9 12
 ちのうた 9 12

[illegible]

つはあうろく、
厚リにも事洋藝の目つけありけむ。
詩より、世にあらねど、
（書）
（書）

[illegible]

と
知は
~~若葉~~
等9
發本
目には
行所
此處
阿27
也
了し
斗を
きん0

富んかた
 (かた) 旦に 釣を
 争ふ
 争ふたかと言ふ。それは富の

此は十行の書に於て
 なる事は一モ一カフキ
 大抵是れ教者の修め
 にあつた

[illegible]

林鶴を下さし
五仙木也。

とう、針は十にんべしや、金髪へす。いこかに傷にありんべゆ。
 判つて晝食り時、来りんべす。さもなつ日は、五時夕暮り、五時
 過ぎには、ゆす来て、無事、回歸りやうに、挨拶あひます。此
 か、三、それがゆす、にレツじヤスア、つたに、立まう、あまう。

せう、新は十八、九、じやう、
 小、肥りに肉はきはいら
 かつ、キリヤ、十人並じやう、
 美人でも、美人で
 もない。か、常に一掃の
 遊、を、老若を、た、金、

とう姫女きみぎの生活環境が快し豊かでありたく
 とは、そのスエーデンが半身も目印で靴下は
 十何店で買へる。たわやの悪い物で
 もある。と難を判ります。

心に用ゐ、我の起成では、
 いと信じます、若に接する處ないではなつと思はれる
 のは、半分の間に一まゝ、その重さゆゑ、微笑する
 こゝを見たこともあり、笑ひあふる妻の姿をのぞいて
 事ありあつし。

手書
 利つ
 か
 七
 赤
 テ
 レ
 フ
 レ
 や
 ス
 を
 つ
 と
 い
 る
 人
 だ
 す。

十年(一)月五日
年(二)月五日
えぬさむいさうふア
人ひた。

園土なく 新は、その果
その土から二壁大輪
茶葉店に傳つたのべり

三
二
一
女
三
日
三
女

その燈火は
店に垂た時
ハリ／＼とし
思ひ出す

カシ 糸や咄より老け
モ、カシ 素よりよく

何、差上4まや、

拊
撿
一

拊
は
組

フ
ア
シ
ン
カ
ス
セ
キ
ト

オ
ー
エ
イ

利はその宛先が不明

余々より通り
若くは日也

三ノ武
三ノ
林
松
を
買

るゝを忘るゝ

金をアノをいりたててすはトクカるゝ事や

子王族十來、色陰の方よりふくまへり

西
乙
江
夕
夕
太
に
衆
ろ
ち
ろ
し
と

船客の女の人に由を造はたり
 その由をば右の如く記し
 傳へしにたつゝもす
 幸に白布子を帯こし
 事なす
 幸に城を拂ふべき
 化世の事なり
 式なり

古く 舟大船可當にはやすく 好意の感懐とか
 テリかの高に上り 彼等他里とレテ 手にはう 五々十々 北に上る
 4や4や するゝゝ 其に 船客に 不~~便~~ 慢不~~平~~を 抱か
 せり 想た。

白布 巾 價の 高しに け おく さう だ

又五日 一同立書せし一掃山十五里 トメハ一箇年

市4之三巡軍手
 官に統制下の物資はたけあし、
 食糧をこま
 オシ、量り知るに、
 食糧をこま

1/5/91
Joni